日本人の葬法

秋田県大湯野中堂(左)・万座(右)縄文環状列石である。死と生の接近し、中心の墓域と周辺の居住空間が隣接している。

日本人の霊魂観は、死は身体から霊魂が遊離することであり、その霊魂なら自由に現世と他界を往来できるという観念を日本人は育てていた 。死者は霊魂がもどれば生き返ることができるという信仰は、神話や伝説・物語の分野だけではなく、日本人の死者の弔い方の実際の民俗(土葬・風葬)からもうかがうことができる。神話などはこの実際民俗の反映であった。

秋田県大湯野中堂・万座の縄文遺跡は死者と生者が同じ区域で親和している。
また、鹿児島県南種子町広田弥生遺跡。幼児人骨が出土。その骨は逆さに埋められて底に穴の空いた甕棺におさめられていた。甕棺は母の胎内であり、幼児の復活を期待した弔い方であった。

沖縄に「マブイグミ（魂篭め）」とよばれる習俗がある。子どもが亡くなったときに、麻糸に子どもの年齢だけの結び目を作り、輪にした麻糸のなかに魂を追い込む動作を繰り返し、そのあとその麻糸を子の首にかける。身体から抜け出た霊魂をもう一度子どもの身体にもどして再生させようという呪術。
同じ沖縄に見られる死を悲しむ「泣き女」の習俗もまた魂を呼び戻す儀礼。魂が身体にもどれば人は生き返るという信仰である。日本人社会に広まっていた「魂呼ばい」も死者の霊魂を呼びもどす呪法。今も新潟県の中越の山古志村では、屋根から落下した人など気絶者に懸命に呼びかける習俗がのこされている。

山口土井ケ浜遺跡　土葬　骸骨露出

新潟県中越山古志村　屋根から落ちた事故者の魂呼ばい

一般日本人の伝統的葬法　死者は山・森の神

ニソの杜(もり)は福井県大飯(おおい)町の大島半島東部に位置し，11月23日にこの地域の人々が祭祀さいしを行う場所である。年に一度だけ祭祀が行わ

れ、祭祀の時以外は絶対に近づいてはならない禁足地とされ、それを破ると祟りが起こると言われている。民俗学者の柳田国男氏はニソの杜のような形態が「日本の神社の原型」であるという。

日本の聖地としては，とくに山岳が重要である。人の死後，死霊や祖霊が山にのぼり，そこを中心に生息するという信仰が古い時代からあった。民俗世界で代表的な聖地とされる福井県のニソの杜（もり），東北地方に分布するモリと呼ばれる山や丘，そして沖縄のウタキ(御嶽（おたけ）)やアシャゲなども，祖霊祭祀と結びついている聖地である。写真はニソの杜と斎場御嶽。

鹿児島県指宿モイドン　壱岐のヤブサ

モイドン（森殿、地域によってモイヤマ（森山））は、樹木や森への信仰のひとつで、強い禁忌を伴い、これを侵すと祟りがあるといわれる。類似する信仰は、若狭大島のニソの杜、西石見の荒神、蓋井島の森山、対馬の天道、壱岐のヤブサ、種子島のガロー山など。

両墓制　香川県多度津佐柳島　立派な拝み墓(霊魂用)と粗末な埋め墓(身体用

日本の墓制の一つ。土葬を基調とする墓制で、1人の死者のために遺骸を埋葬する墓（埋め墓）のほかに、供養のために詣る墓（詣り墓）を設ける。遺骸を埋葬した墓で供養を続ける単墓制に対して両墓制とよぶ。事例はおもに関東から中国、四国地方に分布し、東北、九州地方にはきわめて少ない。死後一定期間だけ埋め墓に詣り、それ以後は詣り墓に詣るというのが一般の傾向である。初七日、四十九日、百箇日、一周忌など、死後1年の間の法事を機会に、詣り墓に供養の中心を移す所が多いが、数年、十数年後という土地もある。

両墓制の個々の事例の成立事情は単純ではない。明治以後、墓地を整備したために、埋め墓と詣り墓の別が生じたという例もある。しかし、宗教的に両墓制を支えているのは、遺骸は穢れているが、ある期間を経た死者の霊魂は清浄なものとする観念である。

中国東海岸複葬の墓　日本両墓制とは異なる肉体・霊魂重視の葬法

権力者の葬法　前方後円墳の誕生と展開　大型前方後円墳の代表例　奈良県桜井市の茶臼山古墳　３世紀中から4世紀中頃までの大王墓

　前方後円墳は古墳時代を代表する古墳形式で、円形の墳丘に方形の墳丘を連接させた形態のもの……他の形態の古墳に比べて圧倒的に大型のものが多く、日本の巨大古墳はすべて前方後円墳であることからもわかるように、古墳時代を象徴する記念物であり、この墳形の確立こそ古墳時代開始の指標である。古墳の格式としては最高位に位置付けられる形態だったと考えられ、前方後円墳の分布は、各時期、各地域の政治状況を反映する。およそ、三世紀中頃ないし後半から六世紀末前後まで、岩手県南部から鹿児島県に至る本州列島の各地で、大小さまざまのものが盛んにつくられた。現在、約四千基の前方後円墳が確認されているが、巨大なものは近畿地方に集中しており、数の上では関東地方東部・北部に多く分布する……　『日本歴史大事典』小学館

　「墳丘の築造には延べ六百四十万人以上の労働力が必要とされる」(大林組『季刊大林２０』)。古墳築造は個人のなしうることではなく、政治権力の誇示でもあったのである。

　前方後円墳の名称については、前掲の『日本歴史大事典』は、

近世の国学者が独特の起源論によって方丘部を前、円丘部を後ろと考えて、「前方後円」という名称をつくり、近代以降の考古学でもこれを踏襲しているが、この種の古墳の前はどちらか、正面はどちらかなどは未解決である。

と解説している。前方後円という名称は確定したものではないというこの解説も貴重である。同事典はすぐつづけて「埋蔵施設は後円部につくられるのが原則で、前方部にも埋蔵施設がつくられることがあるが、中心的な埋蔵施設は必ず後円部につくられる」と記述している。あきらかに「前方後円」ではなく、「前円後方」なのである。

中国の天円地方の思想　　北京天壇

北京市の故宮崇文区に有名な天壇公園がある。北京でもっとも有名な観光地区になっている。二七〇万平方メートルの広く静かな公園である。巨大な祭祀用の壇廟建築で、明、清王朝の皇帝が毎年天地の神を祀り、豊作を祈った場所で、もともと明代の永楽帝が十五世紀半ばに建設したものであった。「天は円、地は方」の思想（　『荘子』ほか）から、北側は半円、南側は方形になっている。祈年殿は傘を広げたような三層の青い屋根を持つ円形の建物で、高さ三八メートル、直径三〇メートルで、釘は全く使われていない。天壇のなかでもっとも美しい建物である。この南側にあるのが皇帝と先祖の位牌を安置する皇穹宇である。内部の灰色の壁は回音壁とよばれ、壁際で話す声がよく反響するように造られている。さらに南側に圜丘がある。ここは皇帝が天に祈りを捧げた場所で、三層の大理石の壇でできている。

地壇

天壇と対面する場所にあるのが地壇である。天壇の主な建築が円形であるのに対して、地壇は方形である。これは『大清会典』の述べる「方（四角）は地を表す」に従っており、中国の天円地方の宇宙観を体現している。

「天は陽、地は陰とみなす」という陰陽思想に従い、天壇の石塊や、階段、柱などはこぞって奇数（陽数）で構成されている。一方地壇は偶数（陰数）で構成されている。例えば方澤壇の階段は8段であり、壇は6方丈である。使用した石版の数も偶数であり、中華文化を反映している。

朝鮮半島の天を祀る祭祀は古代から行なわれており、高麗王朝の第六代国王成宗二年(九八二)には、円丘祭として制度化されたといわれている。このように円丘祭（　ウォングチェ）は、三国時代から高麗時代、李氏朝鮮時代と代々の王朝で行なわれ、一八九七年に第二十六代高宗が大韓帝国の皇帝に即位したときまで継続していた。

重要なことは、中国や韓国にあった皇帝による祭天祭祀が日本には存在しなかったことである。厳密にいうと、平安時代に三度だけ記録にのこっているが、例外的なものであり、対になる地の祭りもなく、祭壇が建造された形跡もない。天皇による国事行為としては定着しなかった(渡辺信一郎『中国古代の王権と天下秩序』校倉書房、二〇〇三年)。

日本は、七世紀から八世紀にかけて国家体制を整えていったときに、中国の隋や唐の法律体系や官僚制度を採り入れた。にもかかわらず、重要な分野で中国の制度の採用や影響を排除していた。天の神の祭りはその代表例である。

大和王権は中国大陸の制度や思想に学んで、日本の国家体制を整備していった。しかし、基層には日本の伝統をしっかりと据えていた。中国の天円信仰を取り込んで前方後円墳を創り出したときに利用した墳墓型式が前方後方墳であった。出雲は大和の統治下に入り、墳墓型式も前方後円墳となったが、しかし、伝統的な四隅突出墳や前方後方墳を絶滅させることはなかった。

出雲地方にその変化が明瞭に見られるように、日本の首長の墓は本来は方形であった。そこへ大和を中心に天円の思想が摂取され、前方後円（前円後方）墳が優勢となった。しかし、アマテラス信仰に見られるように、日本人は天の信仰が伝来しても、大地の信仰を失うことなく、墳丘の型式も方形重視にもどっていったのである。

仏塔

仏塔は、仏舎利（釈迦の遺体・遺骨、またはその代替物）を安置した仏教建築をいう。卒塔婆、塔婆、塔、ストゥーパ(Stūpa)巴: thūpa)、供養塔とも呼

ばれる。
　ストゥーパとはサンスクリット語で「高く顕れる」という意味であり、仏教の世界観である涅槃の境地を象徴している。 ストゥーパが古代インドから中国に仏教が伝来した際、「卒塔婆」と音訳された。「塔婆」や「塔」はこの略である。
　インド仏教本来の墓石はこの天円の高塔であった。

高塔型と方型を融合した仏教伝来後の日本の墓型

　仏教伝来後の日本人の和式と呼ばれる墓型は高く聳える仏教本来の高塔型を継承しながら、日本の伝統的な大地に執着する方型を基礎に据え、死者の遺骨はその方型に葬った。
　伝来した仏教の天円の教義、信仰は取り入れながら日本人本来の大地への地方の信仰を失うことなく、両者を融合させた。

　秋川雅史の大ヒット曲「千の風になって」は、
「私のお墓のまえで　泣かないでください　そこに私はいません　眠ってなんかいません　千の風に　千の風になって　あの大きな空を　吹き渡っています」
とうたっている。日本人に確固として継承されてきた霊魂観に訴えかけたところに、この歌のヒットの秘密があった。
　二〇一四年、韓国珍島沖で修学旅行生を乗せた観光船セオゥル号の沈没とい

う海難事故が起きた。その際に韓国の人気歌手が「千の風になって」を韓国語に翻訳し、追悼曲として歌い大ヒットになった。しかし、歌い出しは「私の写真のまえで泣かないでください」と改められ、千の風になって吹き渡る箇所は「朝はヒバリになり寝ているあなたを起こします」と替えられた。

日本の身体軽視の霊魂観に対し、身体、ことに遺骨を重視し墓を大切にする韓国では、霊魂が墓に止まらず、風となって吹き渡る「千の風になって」の歌詞をそのままで歌うことはできなかった。そのような遊離魂が存在するなら、子孫に弔われず、悪鬼となって祟る死霊にほかならない。

日本人の墓石の型や葬法の変化にも、大地の信仰を重視し、死後に霊魂は大地に帰ってゆくという日本人の文化の本質を見ることができる。権威の象徴としての巨大古墳は中朝の遺骸重視の産物であった。仏教は大乗仏教の系統が中国朝鮮を経て６世紀半ばに日本へ伝来したが、一般庶民に広まったのは、江戸時代以降であった。墓石の普及は明治以降であったが、しかし、小さな家墓には霊魂重視と仏教の教義の遺骨重視の調和がある。

日本人の墓石の変化にも、海外文化と伝統文化の融和、政治権力と庶民意識の角逐・融和の歴史が見えてくる。歳神(としがみ)信仰に示されるように、日本の死者は広義の神霊の一種であり、現世の人間とも多くの共通点があった。　循環の死生観である。歳神(としがみ)信仰に示されるように、日本の死者は広義の神霊の一種であり、現世の人間とも多くの共通点があった。循環の死生観である。

つづく